

松明職人^{たいまつ} 和光信雄さん

吉田の火祭りを支える大松明づくり

山梨県富士吉田市で毎年8月26日と27日の2日間にわたって行われる吉田の火祭り。

26日の夜には70~80本の^{おおたいまつ}大松明に火が灯され、祭りは最高潮に達する。

和光信雄さんは9歳のときからこの松明づくり^{たいまつづくり}(松明結)に参加し、

81歳になる今も松明づくりに取り組みながら、親方として職人たちを統率する。

だが松明づくりの職人は高齢化とともに、年々数が減っている。

このままでは吉田の火祭り自体が存続を危うくしかねない状況だ。

2人1組で1日に1本 つくるのが限界

大松明は筍のような形をしていて、^{おたびしよ}御旅所に置かれる2本はさらに大きく約3.3メートルにも及ぶ。

中にはアカマツのマキがびっしりと詰め込まれている。アカマツを使うのは、松やにによって火力が強いうえに火が^は爆ぜないからだ。

松明の中心には直径12センチほどの芯棒が入れられている。その芯棒を囲むように1本50センチほどのマキを縦に積み重ねていくのが大松明づくりの基本だ。松明は上部(頭)から下部(袴)にいくにしたがい、太くなっていく。一番下は直径1メートルほどになる。マキを詰め込んでいく作業は頭から始めて、徐々に下部へと進めていく。マキを囲むようにバタと呼ばれる^{きょうぎ}薄い木の板を打ち込み、一番外側は^{きょうぎ}経木(アカマツの薄い皮)で覆う。そしてその上を荒縄できつく締める。

はたで見ていると、簡単な作業のようにも思える。だが、マキを詰め込んでいく作業には熟達の技が必要

だ。マキとマキの間に空間ができると、火が燃えにくくなるし、松明そのものがもろくなってしまふ。もちろんマキは1本1本、形が違う。まっすぐなものもあれば曲がっているものもある。そうしたさまざまな形状のマキを隙間なくバランスよく詰め込んでいかなければならないのだ。「2人1組になって朝8時から夕方

の5時頃まで作業して、やっと1本できる。松明を立てたときの形を見れば、マキがうまく詰め込まれているかどうか、すぐ分かる」

松明づくりの現場では、ときにはベテランの職人に対しても厳しい叱声を飛ばす和光さんが、今は穏やかに^{ぼくとつ}朴訥な口調で語る。

富士吉田の町が 紅蓮の炎に包まれる

吉田の火祭りは、北口本宮富士浅間神社と諏訪神社両社の祭りである。もともとは諏訪神社の祭礼で、400年以上前から行われていたと伝えられている。かつては祭日が毎年変動したが、大正3(1914)年の社司、氏子総代の合議で、毎年8月26日と

27日に行くことが決定された。日本三大奇祭のひとつとされ、26日は「鎮火祭」、27日は「すすき祭り」とも呼ばれている。今は夏の富士山の山じまいの祭りとしても知られている。

大松明に火が灯されるのは、26日の夜だ。大神輿^{おおみこし}と御影^{みかげ}が参道を下り、氏子町内をめぐって夕暮れに御旅所に奉安される。と同時に、本町通りの沿道約1キロに立てられた70本から80本の大松明に一斉に点火される。各家の前に置かれた井桁状の松明にも火が灯されると、あたたか^{あたたか}も富士吉田市上吉田地区全体が紅蓮の炎に包まれたかのような様相となり、人々を否が応でも興奮へと駆り立てる。その光景は勇壮であり、鮮烈だ。

「昔は夜中に松明が燃え尽きるまで燃やしたものです。しかし今は通りを開放するようという警察の指示があり、夜の10時半頃には火を消さないといけない。7時頃に点火して3時間半で燃え尽きるくらいにするには、どれくらい太さのマキをどう詰め込んでいけばいいか、考えないといけません」



松明の芯棒に使われる丸太は檜。芯棒を入れないとバラバラになってしまう。外側に巻かれる厚さ3ミリほどの経木も昔は鉋で薄く切っていた。
(写真提供：ふじよしだ観光振興サービス)



わこう・のぶお 1933（昭和8）年生まれ。9歳のときに祖父・銀太郎さんを手伝って松明づくりに初めて参加。以来、70年以上にわたって吉田の火祭りの大松明づくりに献身してきた。真夏の作業は激しく体力を消耗するが、今も親方として現場を取り仕切る。暴飲暴食をしないのが健康の秘訣という。2012年度富士吉田市文化功労者。



火祭りには清浄であることが求められるため、不幸があると松明づくりの職人が参加できないのはもちろん、木材などの材料の提供もできなくなる。
(写真提供：ふじよしだ観光振興サービス)



祭りの当日に嵐のような雨が降ったこともあるが、アカマツには松やにが含まれていることから、これまでに松明の火が消えたことは一度もない。
(写真提供：ふじよしだ観光振興サービス)

和光さんが言うように、松明づくりは歳月とともに変わってきた部分もある。たとえばマキづくり。かつてはのこぎりや鉋^{なた}などを使って手作業でつくられていた。しかし今はマキ割機が使われている。

けれどもそれで単純に楽になったかといえば、そうでもない。節などを削るのは相変わらず手作業だし、早く燃えるように昔に比べると細いマキを使っているし、乾燥期間は3ヵ月ほどにも及ぶ。マキづくりにかける時間はむしろ昔より今の方が長い。

黒子に徹し、真夏の作業に懸命に取り組む

しかも実は大松明の数そのものが、昔よりずっと多いのだ。大松明は氏子などが神社に寄進して奉納することになっている。一度奉納すると、多くの人や団体が翌年も奉納する。そのため大松明の数は年々増え続ける傾向にある。和光さんが若かった頃は40本以下だったという。今、松明に使うマキは5,000束と倍ほど必要だ。

その一方で松明づくりを担う職人は減り続けている。松明づくりに従事するのは年1回、1ヵ月程度にすぎない。生業にできる仕事ではない。だから職人はいずれも生業を別を持っている。和光さんも、もともとは大工職人だった。

昔は兼業農家などが多く、それでもやっていけた。だが近年はこの地域でもサラリーマンが多くなり、松明づくりのため1ヵ月仕事を休むというようなことのできる人はほとんどいなくなってしまった。そのため手がどんどん減り、高齢化が進んだ。今、松明づくりの職人は5～6人いるだけ。一番若い人でも60代だ。松明の数が少なく、職人も多かった頃は、お盆過ぎから松明づくりを始めても十分間に合った。今は7月の

下旬から始めないと、とても追いつかない。富士山の麓とはいえ、夏の日差しはきつく、気温も上昇する。その中で高齢の職人たちが4～5人、汗みずくになりながら懸命に松明づくりに取り組んでいる姿を知っている者は、そう多くない。

「俺たちは黒子だから…」

そう言って、和光さんは多くを語らない。だが、もし松明をつくる職人がいなくなれば、吉田の火祭りはいったいどうなってしまうのだろうか。

俺がやらなければ、という使命感が駆り立てる

和光さんは9歳のとき、初めて松明づくりに参加した。当時、松明づくりの親方をしていた祖父の銀太郎



現役の和光さん（中央）と、作業場として工場を提供するなど、松明づくりを支える富士吉田木材流通センターの天野社長（左）と同流通センターの渡辺さん（右）。

さんを手伝うためだった。その後、父親の信光さんが親方を務めていたときも含めて、和光さんはずっと松明づくりに取り組んできた。銀太郎さん以前の先祖のことは分からないが、少なくとも3代続いて松明づくりをしてきたことになる。松明とともに生き、吉田の火祭りを支えてきた人生である。

「松明づくりは爺さんに叩き込まれた。大変と言えば大変だったけれど、別に苦勞と思ったことはないね。祭りの日に嵐のような雨が降ったこともあったけれど、松明の火は消えな

かった。松明がきれいに燃えるのを見れば、そりゃあうれしいね」

2012年、その功績が認められ、和光さんは富士吉田市文化功労者に選出された。同年には吉田の火祭りが国の重要無形民俗文化財に指定され、去年は富士山が世界遺産に登録された。このところ和光さんの周りでは慶事が続いた。

だが、松明づくりをめぐる環境は、悪化の一途をたどっている。1978年から松明づくりの作業場として工場を提供するなど、物心両面で和光さんたちを支えてきた富士吉田木材流通センター社長の天野多喜雄さんが言う。

「30年以上、和光さんの仕事をそばで見してきましたが、大変なご苦勞をされていますよ。吉田の火祭りの

ために誰が一番頑張っているのか…。このお年になってもやめないのは、俺がやらなければ、という使命感があるからです。実際、和光さんがやめたら松明づくりは行き詰まるでしょう。そうなれば火祭り自体、どうなることやら。そういう厳しい認識を持っている人が少ないことにも、私は危機感を抱いています」

去年はどうしても祭礼までに間に合いそうもないと思い、天野さんは初めて松明づくりを手伝った。だが、経営者として会社を切り盛りする天野さんは、一時的に手助けするのが精いっぱいだ。

小学生を対象に、野外教室で松明づくりを教えたこともある。祭りの世話人に松明づくりを体験してもらったこともある。若い人が「松明づくりをしたい」と言ってくることもまれにある。だが、実際に作業に参加する者はほとんどいない。

吉田の火祭りは今年も8月26日と27日に行われる。紅蓮の炎の向こうには、はたしてどんな未来が待ち受けているのだろうか。